Nara National Museum

奈良国立博物館だより

第83号

平成24年 10・11・12月

阿弥陀如来坐像 当館蔵（なら仏像館にて展示中）

特別展
第64回
正倉院展
10月27日（土）～
11月12日（月）
東・西新館

特別陳列
おん祭と春日信仰の美術
12月8日（土）～
平成25年1月20日（日）
西新館

特集展示
新たに修理された文化財
12月26日（水）～
平成25年1月20日（日）
西新館

名品展
珠玉の仏たち
通期開催
なら仏像館

中国古代青銅器
通期開催
青銅器館

話題

當麻寺の魅力

―特別展「當麻寺」（仮称）の紹介をかねて―

奈良県葛城市に所在する當麻寺は今年、縁起によれば前身寺院の草創から一四〇〇年を数える大和の古代寺院です。駱駝のこぶのような二つのピークを持つ二上山の山麓に立つこの寺院には、白鳳期の弥勒仏像、四天王像、梵鐘などが今も伝えられ、東西両塔がそびえる風情は、訪れる者を今も古代へと誘います。

そして本堂に本尊として懸けられているのは、その名も「当麻曼荼羅」。阿弥陀如来の極楽浄土の様子を表し出す約四メートル四方の巨大な掛け軸です。根本の曼荼羅は綴織で、八世紀に作られたもの。この当麻曼荼羅は、世を儚み極楽往生を望んだ一人の清い女性の思いによって織り表された奇跡の曼荼羅として、平安時代終わり以後、広く世に知られるようになりました。

二上山の夕日

来年は、この当麻曼荼羅が織り表されたと伝えられる天平宝字七年（七六三）から一二五〇年という節目の年。そこで当館では、来年春に特別展「當麻寺」（仮称）を開催するため、ご寺宝の調査研究を進めてまいりました。ここでは展覧会の導入をかねて、この曼荼羅織成の物語をご紹介いたします。

中将姫という名で知られるその姫は、現世を離れ極楽浄土へ生まれることを望んで出家します。極楽往生を願い過ごす彼女は、その目で生身の阿弥陀如来を見ることを望みました。そんな彼女のもとに一人の尼が現れます。尼の指示通り糸（蓮糸）を用意したところに織女が現れ、一夜にして極楽浄土の様を織り表しました。尼の本当の姿は極楽に住む阿弥陀如来、そして織女は観音でした。極楽浄土の様子を目前にした姫は日々祈りを重ね、遂に二十九歳の時、阿弥陀聖衆の来迎を受け、極楽へと往生するのでした。

◎四天王立像のうち持国天（奈良・當麻寺）

この物語は様々に脚色され流布しましたが、この奇跡の曼荼羅のある寺・當麻寺は、そこに極楽が存在し、さらに参拝者を極楽へと導く阿弥陀浄土信仰の聖地として大いに信仰されることになります。

展覧会では、当麻曼荼羅を軸とした極楽浄土信仰の展開を示す品々とともに、草創期を彷彿させる仏像や考古遺物、密教化が進んだ平安期の仏像群、さらに葛城山へと連なる修験の道との関わりを示す品々など、ご寺宝を中心に構成した出陳品によって、奥深い當麻寺の信仰の歴史とその魅力を描き出します。

通常非公開の根本曼荼羅・国宝綴織当麻曼荼羅も博物館へお出ましになります。来春の特別展をお見逃しなく。

北澤　菜月（当館学芸部研究員）

織女（右）と完成した曼荼羅を見る中将姫と尼
◎当麻曼荼羅縁起（部分）（奈良・當麻寺）

【表紙写真解説】

阿弥陀如来坐像

木造・彩色
像高三五・九センチメートル
平安時代（九世紀）
当館

身体に対して過大な頭部が目につく像容である。異相というべき魁偉な表情には古密教的な趣も感じられる。

電子顕微鏡を用いた科学的な調査によって、用いられた材はカヤであることが確定している。表面は黒く塗られて古色を呈するが、これは後世の所為。細部を観察すると、着衣の一部には朱彩が認められる。肉身部の彩色の詳細は不明だが、肉色ないし金色であったかと推測される。

像のすべてを一材から丸彫しており、腹前においた両手先も同材からの彫出であるので、印相は当初のままである。両掌を重ねて指を組み合わせ、立てた人差指の上に親指を乗せている。これは密教に由来する定印と呼ばれる阿弥陀如来の印相である。

定印を結ぶ阿弥陀如来像は、現存作例では安祥寺の五智如来像（九世紀半ば）のうちの無量寿如来像を嚆矢とし、仁和四年（八八八）の仁和寺阿弥陀如来像および寛平八年（八九六）の清涼寺阿弥陀如来像がつづく。本像は構造・作風から九世紀にさかのぼる制作とみられ、これらと相前後する時期のものと考えられる。定印阿弥陀像の古例として、今後注目を集めるであろう作品である。

岩田　茂樹（当館学芸部長補佐）